

千里の馬は大食らい

——韓愈「雜説」の「食」字について——

はじめに

「世に伯樂有りて、然る後に千里の馬有り」から始まる韓愈の「雜説」は、高等学校の漢文教材として安定した採用率を保ってきた。ただし漢文に割りあてる時間数の減少もあつてか、高校に入つてすぐの学年で必ず習ふべき教材という性格は徐々に薄れてきたようである。散文としては「史記」項羽本紀からの「鴻門之会」や「四面楚歌」、さらには陶淵明「桃花源記」などと一緒、これまでの課程で準必修とされた教科書「国語Ⅱ」に載る傾向が強いようである。平成十五年度からの新たな必修科目「総合国語」では、漢文入門の意味合いから故事熟語として「矛盾」などの散文が載っているはずである。ただし、それを発展させて散文の韓愈「雜説」までを新課程での必修教材に取り込んでいる教科書は二社あることを確認してみたが、おそらく少数例かと思われる（小論末尾参照）。新教科書での教材調査をほとんどしないまま、この稿を書き始めたが、今後は高校一年生に韓愈の文章を教える機

岩 見 輝 彦

会は、ごくまれであると考えたほうがよさそうである。

それでも馬の見立ての名人伯樂は、いわば名コーチの比喩であることを気づかせ、中国を代表する名文家が、人物の才能をしっかりと見抜くコーチこそが世に稀な存在なのだといっているのだから、今は気づかれないでいる各自の潜在能力が、名伯樂に出会いさえすれば大きく花開く可能性があるのだと、生徒に希望を抱かせることもできる教材が、韓愈の「雜説」である。各社の教科書でも「学習のねらい」は、「作者は何を言おうとしているか考えてみよう」と問題を提起し、「伯樂」と「千里馬」がなんの比喩であるかを考えさせており、これは十代半ばの学習者にとって無理のない課題といえる。それだけに韓愈「雜説」は、是非とも高等学校で教え続けられるべき教材であつてほしい。

そして教師としては、訓読の順や解釈にさほどの難しさを覚えないだろうこの教材にあつて、参考書などで予習してこずに教科書を初見した学生が、途中の文「食馬者、不知其能千里而食也」をどう読むかに注目することになる。ここに出現する「食」字に

振られた、馬を「やしなフ」者、という訓読みにどれだけ学生が留意し、続く「食」の字に「ハ」の送り仮名があるだけの箇所を、「食（くら）はず」や「食（く）はず」と誤読せずに、きちんと「やしなはざるなり」と訓読できるかどうかをチェックするのである。ただし本稿では、この「食」字の首義を再考し、教科書に採用できるレベルの、別の訓読が成り立つことを指摘してみたい。

日本人は古来、この韓愈の名文が収められた『古文真宝後集』『文章軌範』『唐宋八家文読本』すべてに親しんできた。「雑説」の返り点や読み下しは、おそらく江戸時代の半ばに『文章軌範』を基として固定化したものが、そのまま現在の教科書まで踏襲され続けているに違いないと推測する。右の箇所は「馬を食（やしな）ふ者、其の能（よ）く千里なるを知りて食（やしな）はざるなり」か、「能」を馬の才能として名詞でとらえ「馬を食ふ者、其の能（のう）の千里なるを知りて食はざるなり」かの、どちらかに読ませている。近時の高校教科書では、この「雑説」の出典を、韓愈の別集である『韓昌黎集』または『昌黎先生集』と明示するものがある。ところが、中国で南宋以降に版行され現存している韓愈の詩文集で「雑説」の右の箇所にはどのような注釈が見えているのかをふまえ、それと『文章軌範』での注解を照らし合わせた上で、訓読を再考するなどの手順を経ないまま、この教材は教科書に載り続けているようなのである。

以下には、南宋の朱熹の時代以降に、韓愈の別集に加えられた注によれば、「食馬者、不知其能千里而食也」は「馬を食（やしな）ふ者、其の能（のう）の千里にして食（くら）ふを知らざる

なり」と解釈および訓読することが可能であることを指摘する。そしてこの読みは、すでに二十数年前から、国内大手出版社が発行する文庫本に載っているのであるが、その「新たな」読みを活字にした中国文学研究者が漢文教育の世界と隔絶しているためか、国語の教科書で採用されないだけでなく、国内で発行されたどの漢文の参考書も言及していないようなのである。本稿では、こうした漢文教材をめぐる問題点に言及する。

1 蜀刻本と五百家注本——別集での「雑説」（1）

韓愈（七六八—八二四）は唐代の半ばに生き、魏晉南北朝以来の文章が美辞麗句を連ねて対句を多用することになった弊害として逆に伝えるべき文意が希薄化してしまったことを批判し、先秦から漢代に綴られていた古文の文体を復興させようとして、言わんとすることを明確に書き表しうる達意の文を綴った人物である。唐宋八大家の筆頭に挙げられることは言うまでもなく、その「雑説」と題された四編の短文も、龍、鶴、医そして馬を比喩に使い、読む者に確実に著者の意のあるところを伝えている。とりわけ、千里の馬は常にいるのに、その能力を見抜くことができる、伯樂が常にいるとは限らないのだ、と述べる「雑説」其の四は、『古文真宝後集』『文章軌範（正篇）』『唐宋八大家文読本』や、中国でよく読まれている『古文觀止』などの名文集すべてに収録される。これらの総集を検討する前に、まず韓愈の別集を調べてみたい。その詩文集全四十巻の中で、この「雑説」四首は第十一巻に収められている。以下には三つに節を分け、繰り返し韓愈の別

集で「雑説」其の四、特に計五回使われている「食」の字にどのよ
うな注釈が加えられているのかの報告を重ねてみたい。

韓愈の詩文集で、現蔵が確認されている最古の版本は、十三世
紀の前半に今の四川省成都付近で版行された、いわゆる蜀刻本で
あろう。北京図書館が所蔵する二種の蜀刻本『昌黎先生文集』の
うち、「雑説」其の四に注があるのは、半葉ごとに十行を刻する
大字本のほうである。まずは、この現存最古の版本（書誌はこの
節末尾に別掲）、韓愈の詩文集から、関連する本文を抜き出し、
どこに「割り注」が入っているのかも示しておきたい。

馬之千里者一食或盡粟一石。今之食馬者〔注〕不知其能千里
而食也。是馬雖有千里之能。食不飽。力不足。：（中略）：
食之不能盡其材。

小字双行の注は本文「今之食馬者」の下に「食去聲下食之同」と
見える（1A、節末の文献番号、以下同）。「食馬者」の「食」は
去声のそれで、入声の本義ではないから「馬をたべる者」の意で
はないという注である。そして下に「食之」とある部分も同様に
去声と明記される。つまり右に挙げた五例目の「食」字のうち、二
例目の「食馬者」および最後の五例目にあたる「食之」の二つだ
けは、その声調は去声であるので注意せよというわけである。

ちなみに去声の「食」字とは、宋代の韻書『広韻』での眞韻で
「飼」と同音同義となる。現代音ではスウ（2.4声）、日本漢字音
では「シ」、動詞であれば訓は「かふ」「やしなふ」「はましむ」
などが当てはまる。

そして右の注を裏返せば、他の三例、一例目の「一食」、三例

目の「而食也」、四例目の「食不飽」は、本来の入声、日本漢字
音での「シヨク」でかまわない、意味も名詞なら食事、動詞なら
食べるという本義で、三例を読みなさいということになる。

よって「食馬者、不知其能千里而食也」は、上の「食」は去声
で「馬を飼っている者」の意となるが、馬を養育する者が何を知
らないのかというと、蜀刻本の注通りだと下の「食」は本音の入
声でよいのであるから「千里を行くことができる（名馬の）能力
ゆえに（大量に）食べる」ということを理解していない、と読み
取ることが素直な理解となる。

別のテキストも参照してみたい。そうすることによって、右の
解釈をその版本の刊行地蜀が地方都市であることから片田舎で行
われていた特殊な読みだろうとして排斥することが不可能となる
ことを、明らかにしたい。南宋の魏仲舒が諸家の注を集成したと
いう『百家注昌黎文集』というテキストである。「雑説」の本
文「今食馬者」の下には「食音似、下食之同○本作今之食馬者」と
いう注がある（1B）。「似」は本来の上声（子音は濁音）がす
でに去声となり、第五例目の「食之」も同音という注であるから、
蜀刻本への注「食去聲、下食之同」と同義となろう。後半の、別
本では本文を「今之食馬者」に作り、「之」の一字がある、とい
う注は、その蜀刻本との本文の異同を記したものとなろう。

さて「雑説」の「食馬者、不知其能千里而食也」という一句に
ついて、日本の漢文教材での普通の読みは、二例の「食」はとも
に音が「シ」で「飼」と同じ、意味は「やしなふ」もしくは「か
ふ」という通説ができあがっていた。それとは違って、南宋にお

ける「雑説」の解釈は「食馬者」の箇所は去声で変わらないが、同句中の「而食也」には去声で読めとの注がなかったのである。もう一例、去声でとらえよと明記があるのは下の「食之不能盡其材」の箇所だけであった。日本で通例となった解釈を、再考する資料となる。

なお小論を執筆するにあたり参照した文献の書誌事項は各節ごとに、ABC…の符号を付けて、該当する「食」字への注記の【所見頁】とともに以下のように略記しておく。

1A 【新刊經進詳註昌黎先生文】卷十一【廿二丁裏】
上海古籍出版社「宋蜀刻本唐人集叢刊」②⑤【八九四頁】
一九九四年 南宋蜀刻本（南宋中期に成都眉山地区で刻された半葉十行本） 北京図書館所蔵

ちなみにこの1Aでの「雑説」の末尾は「嗚呼、其真無馬也邪、其真不識馬邪」で、「識」の下に割注「一作知」がある。同じ南宋中期の蜀刻本でも版式が每半葉十二行の『昌黎先生文集』では「嗚呼、其真無馬也邪、其真不識馬邪」で終わるが、こちらの蜀刻本では「雑説」四に注はない（同「宋蜀刻本唐人集叢刊」②⑤【三〇〇頁】）。

1B 南宋・魏仲舉集注「五百家注昌黎文集」卷十一
台湾商務印書館刊、洋装影印本文淵閣「欽定四庫全書」第一〇七四冊【三三二頁上段】卷十一【二二二頁表】

2 朱熹の校異——別集での「雑説」(2)

前節で指摘した南宋の「雑説」の読みが、中国においてはさわ

めて普通の解釈とされ続けてきたことを、さらに資料を加えて明らかにしてみたい。朱子字の大成者、朱熹（一一三〇～一二〇〇）による理解である。

南宋の孝宗の治世（一一六三～一一九〇）に、すでに韓愈の文集の文字の異同をまとめた書物『韓集校正』が刊行されていた。そして「雑説」の本文「食馬者」の上に「今」字が有るか無いかの異同を注記している（汲古書院刊の古典研究会叢書漢籍部39方崧卿撰『韓集校正』卷四【十一丁裏】、また「四庫全書」本の影印版では卷四【十四丁裏】）。ただし「食」字の音義についての注はない。朱子はこれを目にした上で、さらに「昌黎先生集」各版の異同を記録して文字の誤脱の推測までを書き残したという。朱熹の門人、張洽（一一六一～一一三七）が校訂刊行した、その南宋刊本が伝わっており、「雑説」からの関連部分を引くと、次のようである（2A・2B）。

食馬 句上或
有今字 **而食** 食下疑脫
一石字

「而食」の「食」字の下に「疑ふらくは一石の字を脱するか」とあることに注目したい。朱子は「食馬者、不知其能千里而食也」という本文の異文として「：而食一石也」と作るテキストを見たのではなく、あくまで頭の中で「一石」の字を加え、韓愈はもと「食馬者、不知其能千里而食一石也」と綴っていたのはいかとも推測し、「一石」の字が入っていれば文意が明解になると注記したわけである。「馬を飼育する者は、其の能力が千里も走

りうるから(一石もの大量の餌を)食べるのだということを知らない」と理解しているのである。どれとどれの「食」の字が去声だとする注こそないが、前節で確認した版本への音注と同様、「而食」の「食」は本音本義(入声「シヨク」)で、千里の馬が大量の餌を「食べる」ことと理解しているのである。

そして朱子によるこうした考異が、韓愈の詩文そのものへの割り注として取り込まれて次々に刊行されていった。四部叢刊に縮印収録された元刊本『朱文公校昌黎先生文集』でも、「雑説」への注記として「而食の下、疑ふらくは一石の字を脱するか」とのコメントを読み取ることができる(2C)。以後、韓愈の文集としてもっとも盛行した版本『東雅堂昌黎集註』を見ても、本文「安求其能千里也」の下には、朱熹による「今之」の有無の注記や、「而食」の下におそらく「一石」の字を脱しているのではとの推測が、次のように注として取り込まれている(2D・2E)。

食馬上或有今之字 而食下疑脱一石字

さらには清末から民国初期の桐城派の文学者、馬其昶による校注本でも、朱熹の「而食下、疑脱一石字」は採用されている(2F)。朱子の読みである「馬を飼っている者は、その能力が千里も行けるだけに一石もの大量の穀物を食べるのだということを知らない」という解釈と、漢文教材「雑説」の訓読として通説化した「馬を食(やしな)ふ者、其の能の千里なるを知りて食(やしな)はざるなり」は違ふということを、ここでは指摘しておく。

2A 南宋・朱熹撰『昌黎先生集考異』巻第四「五丁表」

山西祁縣圖書館藏宋刻本影印 上海古籍出版社 一九八五年

【一三三頁】(同社二〇〇一年刊の校点排印本【九〇頁】)

2B 南宋・朱熹撰、張浚校補『原本韓集考異』巻四

洋装影印本「四庫全書」第一〇七三冊【一七〇頁上段】巻四

【六丁表】韓愈の文章と合成させた『別本韓集考異』では巻

十一【同前四一九頁下段・一九丁表】。ただし「文淵閣」本の

影印では「食馬上或有今之字 而食下疑脱一石字」と見え、この

「石」字は四庫全書の書写係が「石」字を誤写したとみたい。

2C 朱熹考異、王伯大音釋『朱文公校昌黎先生文集』巻十一

【十二丁表】元刊本影印 商務印書館「四部叢刊」【二二丁】

集部】

2D 南宋・廖臺中集註『東雅堂昌黎集註』巻十一

洋装影印本「四庫全書」第一〇七五冊【一九五頁下段】

2E 同『昌黎先生集』清・同治己巳年江蘇書局重刻東雅堂本

巻十一【廿三丁裏】台北・新興書局影印『韓昌黎全集』【二

〇七頁下段】

2F 馬其昶校注・馬茂元編次整理『韓昌黎文集校注』第一巻

断句排印本覆印 台北・世界書局「中國學術名著」【二〇頁】

新式標点本 上海古籍出版社 一九八九年【三五頁】

3 韓柳文での注——別集での「雑説」(3)

前節までに検討した現存最古の版本『昌黎文集』や、朱熹撰の原本『韓文考異』などは伝本が稀であり、我が国の室町時代や江戸時代に伝えられた痕跡はなからう。韓愈の「雑説」が邦人に親しまれたのは、明らかに『古文真宝』などの総集によっている。

漢文教材としての訓読は、けつして韓愈の別集での解釈を念頭に置いたものでないことも明らかにしなくてはならない。

さらには和刻された韓愈の詩文集では、以下に報告するように、なぜか朱熹による推測が薄められる音注が加えられていたり排除されており、結果として『文章軌範』にある注釈に従った読みで「雑説」は教材化されていったようなのである。

まずは柳宗元の詩文集と合刻された「韓柳文」の和刻本から検討してみたい(3A)。その元の版は南宋以来の古注に明の蔣之翹が宋元明人の評語を加えたといわれる『唐韓昌黎集』。「雑説」其の四だけに限らず全体にわたって小字双行の注が多く加えられている。鵜飼石齋による訓点通りに、本稿で問題としている「食」字を含む部分の本文を書き下すと次のようになる(カタ仮名は原刻の送り仮名の再現、それにひら仮名を補って書き下した)。

馬ノ千里ナル者(も)一食二或ハ粟一石ヲ盡ス。馬ヲ食フ者(も)其ノ能ノ千里ナルコトヲ知りテ食ハス。……食飽カ
ず力足ラズ……食フコト其ノ材ヲ盡スコト能ハズ……

本文「食馬者、不知其能千里而食也」での「食」は、二例とも去声の「シ」で「かふ」もしくは「やしなふ」と訓読している。現在の漢文教材での通説の読みと同じであり、蜀刻の宋版や朱熹の読みとは違ってきている。それというのも、本文「安求其能千里也」の下に次のように書き下しうる注が置かれ、その最初の音注に従ったためである。

「食馬」「而食」ノ二ノ「食」ノ字皆音嗣。「食馬」ノ上二或ハ「今之」ノ字有り。「而食」ノ下二疑ふらクハ「二石」ノ字ヲ

脱ス。……(下略)

「食」の音が「嗣」ならば去声、訓は「かふ・やしなふ」となる。「食馬者」も「而食也」も同じ音義であれば、教材として定説化した訓読と同じになる。ただし続く「食馬上或有今之字」と「而食下疑脱二石字」は、朱熹の考異そのままであるから、「二石を食(くら)ふ」とあったのではと疑う注の前に、同じ箇所を「食(か)ふ」と読ませる音注を置いたことは、明白な矛盾である。

もう一例は清・林雲銘撰『韓文起』の和刻本であり、朱子の考異は取り入れられていない。「食馬者」の右傍に小字で「飼同」と注記があり、直後の「而食也」と五例目の「食之」の計三回の「食」字の右上に半円が刻されている(3B)。去声で読めとの圈発であり、他の二例の「食」にこれはない。もともと唐版を検しないかぎり、この圈発が清の林雲銘によるものか、それとも尾張藩の儒者が訓点を付けるに際して、新たに加えたのか不明である。ただし、この三例に去声の圈発を付すことは、江戸後期刊の『文章軌範』や『唐宋八家文』と共通なのである。

3A 明・蔣之翹注 鵜飼石齋点『唐韓昌黎集』巻第十一「二十九丁裏」 万治三年(一六六〇) 京都秋田屋平左衛門 覆明・崇禎刊本 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』第七輯「三八頁下段」汲古書院 一九七五年

3B 清・林雲銘撰 神野世猷点 秦鼎 補標『韓文起』卷之六「二十八丁表」 文政六年(一八一三) 名古屋永楽屋東四郎刊 本 同前「和刻本漢籍文集」第一輯「三八八頁下段」同 一

4 「食」はすべて音「シ」——『古文真宝後集』

日本での韓愈「雑説」の受容は、前節までに挙げたような別集によつたのではなく、もつと卑近な総集を通してなされたはずである。いささか駆け足気味となるが、『古文真宝後集』と『文章軌範』での訓説を考察してみたい。

室町時代の僧侶が『古文真宝』を講じた抄物で「雑説」の「食」字をどう読んでいたか、今回は明確に判読することができなかつた。しかし江戸時代の前期、十七世紀半ばごろに刊行された『古文真宝後集』では、「雑説」に五出する「食」をすべて「飼」と同じ音の「シ」として、「やしなふ」もしくは「かふ」と訓読している。まずは万治三年（一六六〇）刊という総振り仮名付きの版本に注目する（4A）。なおタイトル「雑説」の振り仮名も「ごつぜい」である。「一食或盡粟一石。食馬者不知其能千里而食也」への振り仮名だけを書き出すと、次のようになる。

ひとたびかふに あるひハ あは いつせきを つくす。
むまをかふ もの そののふの せんりなる事を しつて
かハ ず。

途中を略すが「食不飽。力不足。」と「食之不能盡其材」は、

……かふ事 あか ず。ちから たら ざれば……

かふこと その さいを つくす事 あたハ ず。

と読める。つまり五例の「食」字すべて「かふ」の訓読みである。

同様に無刊記本であるが、カタ仮名で読みを振つた『古文真寶』でも「食」字の読みはまったく同じで「ヒトタビ カフニ」「ムマヲ カフモノ」「カハ ズ」「カフコト アカズ」「カウコトソノ サイヲ」と読ませている（4B）。

さらに同時期である寛文三年（一六六三）刊、林羅山諺解、鶴飼石齋増述の『古文真寶後集諺解大成』を検しても、「一食或盡粟一石」の「一食」の左傍に「ヒトタビカフニ」、「食」の右傍には「シ」と音を振り、次のような注解を続けている（4C）。

【食】詳忖切、音寺、以食食人、孟子食志食功

「食」を「詳忖ノ切、音寺。食ヲ以テ人ヲ食（やし）ナフナリ」と注し、『孟子』滕文公下（4章）での「志ニ食（はま）シヌ、功ニ食（はま）シヌ」を例文として引いている。そして「食」字の二、三例目や五例目を「かふ」と訓読みしているだけではない、四例目もやはり「食（か）ふこと飽かざれば」と読んでいる。

このように『古文真宝』では古く、「雑説」に五出する「食」字のどれをも「くらふ」とも「シヨク」とも読まなかつたのであり、古訓を紹介している参考書ではそれへの言及がある（4D）。すべて「飼」と同音同義に解したのであり、「食馬者不知其能千里而食也」は「馬を食（か）ふ者、其の能の千里を知りて食（か）はざるなり」と、通説と同じ意味での読みとなる。しかも題が「諸儒箋解」とあるだけに、注を刻する『古文真宝』では、この箇所にも『文章軌範』にみえる謝暈山の解が差し挟まれており、通説以外の読みは成り立つ余地がない。むしろ問題は、すべてを「かふ」と訓じていた「食」の字の「一食或盡粟一石」と「食不

飽」だけを、いつごろから見直して本音本義の「シヨク」に是正したかであろう。江戸期に版行された『古文真宝』の訓点を数多く調べれば、解答はみちびかれるに違いないが、地道な努力をおこたっているので、本稿では報告ができません。ままである。

なお管見の範囲では一社だけ『古文真宝』を出典として韓愈「雑説」を載せる教科書を出しているが、通説の訓読を採用するもし「古文真宝」を受容した当初の音訓を再現するのであれば、五出する「食」の音は「シ」となる。大学生用の漢文テキストでは、『古文真寶後集』での古来の読みを再現したのではと思えるものが一冊ある。ただし出典は『唐宋八家文讀本』として「雑説」を載せているが、その「食」には五例とも、古訓に従って「飼ふ」の意に訓読させる送り仮名がある（4E）。

以下、節末への文献リストでは、『抄録』や『訳文』として「雑説」の書き下しや訳文を一部引用することがある。

- 4 A 〔舊題 宋・黄堅編〕『魁本大字諸儒箋解』古文真寶〔後集〕 卷一〔二丁裏〕万治三年（一六六〇）正月 木村次郎兵衛刊本 長澤規矩也編『和刻本漢籍文集』第二千輯〔三三六頁〕汲古書院 一九七九年

- 4 B 久富哲雄編『影印 仮名つき（錦繡段・三體詩・）古文真寶』巻上〔二十二丁表〕クレス出版〔三一五頁上段〕一九九二年

- 4 C 林羅山諺解、鶴飼石齋増述『古文真寶後集諺解大成』寛文三年（一六六三）版 卷四〔十六丁〕早稲田大学出版部「先哲遺著 漢籍國字解全書」第拾貳卷『古文真寶後集』〔二一七頁〕

一九一二年

- 4 D 柳町達也『古文真宝』明徳出版社「中国古典新書」〔八四〇九四頁〕一九七二年

【抄録】一食 「食」は飼う。飼料をやる。食べものを動物に与える。ここの文はみな馬を飼うことをいっている。従がって従来「一タビ飼（か）ウニ」、あるいは「一食（し）」と訓んでいる。

- 4 E 榊原邦彦他編『漢文入門』〔六五頁〕和泉書院 一九八二年

5 「やしなふ」と読む通説——『文章軌範』の注

韓愈が四編綴った「雑説」のうち、『文章軌範』巻之五、小心文では第一の「龍」を「雑説上」、第四の「馬」を「雑説下」として採録する。そして「世に伯樂有りて」と始まる文に五出する「食」字を、『文章軌範』では「シヨク」「やしなふ」「やしなはざる」「シヨク」「やしなふに」と音訓を分けて読むことが定説化している。第一の「一食」および第四の「食不足」だけを「シヨク」と音読みして本義にとらえ、他の三例は「やしなふ」と訓読みにするのであるが、それはこの文集の編者、南宋・謝枋得（号は景山）が差し挟んだ注釈によっている。二、三例目の「食」字が見える句に限定し、その注を引用してみよう。本文「食馬者不知其能千里而食也」に、次の注が付されているのである。なお引用は文字、訓点とも嘉永六年刻の官版による（5A）。

今之養君子不知其為異才而加禮養

読み下すと「今の君子を養ふは其の異才爲るを知りて禮養を加へず」となり、本文「食馬」が「君子を養ふ」、「而食也」の部分が「禮養を加へ」（ず）となる。さらに疊山による注は○を置き、次のように韓愈の意のあるところの解説へと続く。

此謂養英雄豪傑者不知其能辨大事成大功而不以尊位重祿養之也

「此に謂ふは英雄豪傑を養ふ者は其の能く大事を辨じ大功を成すを知らずして尊位重祿を以て之を養はざるなり」と、こちらも本文の「食」を「養（やしなふ）」に置き換えている。「食」字への音注こそないが、ともに去声で「飼」と同義と解している。これが漢文教材「雜說」の読みとして定着したといえる。

よって「雜說」を『文章軌範』から引く限り、「食馬者、不知其能千里而食也」を「馬を食（やしな）ふ者、其の能（よ）く千里なるを知りて食（やしな）はざるなり」と訓読する定説は、その出典の注解者、謝疊山の読みを正しく再現したものであるから再考の要なしということになる。

なお江戸時代末期以降に盛行した『唐宋八大家文読本』については、特に考察を加えない。それは本来、韓愈の文集への注を参照して読まれるべき八家文の第一部が、こと「雜說」に関しては『文章軌範』で定着した読みをそのまま援用しているように思えるからである。韓愈の「雜說」であれば、それが「古文真宝」に載っているものであろうが『唐宋八大家文読本』の編であろうが、すべて『文章軌範』の謝疊山注にしたがって読むことが通例化してしまっただといえる（5B・5C）。よって通説で「やしな

ふ」と読んでいる「食」字、特に三例目のそれを「くらふ」とも読めるのだという異説を紹介した参考書は皆無である。

この「食馬者、不知其能千里而食也」の部分について言えば、「不」をどこまでかけるかの、訓読の順番に別の方法があることを指摘し、その場合でも意味には変わりがないと結ぶものだけである（5Dなど）。つまり「不知其能千里而食也」と返り点をつけ、「其の能く（または能の）千里なるを知らずして食（やしな）ふなり」と読むことも可能と説明するわけである。訓読の順番を変えても、意味するところはまったく同じということを、数学の集合理論を援用し、図解しながら生徒に教えたという実践研究報告も、漢文教育の専門誌に載った（5E）。ただし本稿で前述した、朱熹の考異や古版の蜀刻本に従い、三例目の「食」字を本音本義の「くらふ」と解し、「不知其能千里而食也（其の能の千里にして食らふを知らざるなり）」とも読み得るし、その場合は違う意味となると指摘する漢文の参考書は、皆無なのである。

5A 南宋・謝枋得編『疊山先生批點文章軌範』卷之五【八丁表】嘉永六年（一八五三）昌坂學問所刊（官版）

5B 前野直彬 訳注『文章軌範（正篇）下』明治書院「新釈漢文大系」18【三四〇頁】一九六二年

「馬を食ふ者は、其の能く千里なるを知りて食はざるなり」

【訳文】ところが、その馬を飼う方では、千里を行く力がある」と知って飼っているわけではないのである。

5C 星川清孝 訳注『古文真宝（後集）』明治書院「新釈漢文大系」16【七七頁】一九六三年

「馬を食ふ者、其の能く千里なるを知りて食はざるなり」

【訳文】馬をやしなう者は、その馬が千里を走ることができ、ことを知ってやしなっているのではないのである。

同『唐宋八大家文読本（一）』同前70【九五頁】一九七六年

「馬を食ふ者、其の能く千里なるを知りて食はざるなり」

【訳文】馬を養う人がその馬の千里を走れることを知らないとき、この馬には千里の能力があつても、食糧が十分でなければ

5 D 田部井文雄 他『研究資料漢文学』6 文【七五〇七九頁】明治書院 一九九三年

「馬を食ふ者は、其の能の千里なるを知りて食はざるなり」

【訳文】馬の飼い主は、その（馬の）能力が（一日に）千里も走りぬくほど（の名馬）であることを知っていて、（それに応じた）飼い方をすると、いうことをしない。

【抄録（語釈から）】また「不知其能千里而食也」とも読み得るが、その意味にちがいはない。

5 E 谷本文明（奈良女子大学文学部付属中・高等学校）へ韓愈「雑説」食馬者、不知其能千里而食也について『新しい漢文教育』第四号【七五・七六頁】一九八七年

6 清水茂氏による「新説」——韓愈の別集への回帰

漢文教材としての韓愈「雑説」の読みが、南宋・謝枋得（晝山）による『文章軌範』の注にしたがつて定説化したであろうことを、前節に述べた。ただし『韓昌黎集』や、その抄出である『唐宋八大家文読本』にもとづいて「雑説」をとらえるのならば、五出する

「食」字のどれが本来の音義の「シヨク・くらふ」で、どれが去声の音「シ」で意味が「かふ・やしなふ」であるのか、再考する余地があるろう。『古文真宝後集』では当初、すべて「シ」と読んでいたことを除外視すれば、一例目「食」と四例目「食不飽」は本音の「シヨク」、二例目「食馬」と五例目「食之」は「飼」と同音同義で異論はない。ただし三例目の「而食也」だけは慎重に検討する必要がある。

南宋の朱熹が、この「食」字の下に「二石」が抜けているのはと書き残したことを重くみれば、音「シヨク」で「くらふ」の訓が成り立つ。そう解する場合は「不知其能千里而食也」と返り点を打つことになり、その馬の能力が千里も走れるから（大量の穀物を）食べるのを知らない、と訳することになる。そして前節末に、この読みを紹介した漢文の参考書は皆無であった。だが（前）京都大学教授、清水茂氏がすでにこうした読みを図書に載せている。それを漢文教育の現場において参考書を執筆する者が見落としているか、故意に無視したか、どちらかなのである。

故、吉川幸次郎博士の高弟として知られる京都大学の清水氏は、早くからほぼ通説どおりに韓愈の「雑説」を訳していた（6A）。書き下し文こそ歴史的仮名づかいを採用しないシリーズでの訳注であるが元版では原文に返り点を入れており、問題の箇所は「食馬者、不知其能千里而食也」で、「馬を食う者、その能く千里なることを知って食うにあらず」との読み下しを発表していた。「不」が句全体にかかるのだから、機能としては「非」に近いとみなしたのか、単純な「ず」ではなく、「あらず」と訓読してい

るのが特徴である。清水氏は、できるだけ和刻本「韓柳文」の訓点にしたがったと明記しているが、ここはその鶴飼石齋の読みとは違う(3A)。そしてこの訳注シリーズそのものが文庫本化される際、さらに通説とは違う読みを改訂をほどこしている。

数年前まで書店で買えた朝日文庫版『唐宋八家文(一)』では、「馬を食う者、その能く千里にして食らうを知らず」という訓読を載せる(6B)。説明調の訳文もハードカバーの旧版での「飼い主の方は、その大食らいめが千里の馬だとは知らない」から、文庫本では「飼い主の方は、千里も走る能力があるからこそ大食らいだとは知らない」と、少しく変更されている。ただしなぜ読みを変更したのか、なら説明がない。その文庫本では原漢文に返り点を付さないが、あえて入れるのであれば「不知其能千里而食也」となる。そしてこの「其の能く千里にして食らうを知らず」という読みは、通説とくらべれば異説となる。日本人の読みとしては「新説」であり、清水氏はなぜ通説と違った解釈を打ち出したのかを弁明していない。ただし、本稿の前半で紹介した通り、現存最古の韓愈の詩文集への注や、朱熹の読みと共通する理解であり、文献的には十分根拠があり、非難排除されるべき解釈ではないと判断する。また清水氏は、別の大手出版社が刊行する文学全集でも韓愈の文集を全訳し、そちらでも文庫本『唐宋八家文』と同様の訳を載せている(6C)。

問題は、こうした異説が発表されていることに、どの参考書も言及しない現状にある。一部の中国文学研究者が、漢文教育界と断絶していることに問題があるのかもしれない。いわずもがな

の学界事情であるが、過去に京都大学で中国哲学・文学の研究大会がおこなわれた際、会場校の強い主張によって併催されるはずの漢文教育の発表会が切り離されたと聞く。後年、伏見にある京都教育大学で漢文教育の学会が開催されても、京都大学の現、旧教員の参加はなかったと記憶する。

6A 清水茂『唐宋八家文上』朝日新聞社「中国古典選」(一)

一四頁(新訂版一九九頁)一九五六年(新訂版一九六八年)

「馬を食う者、その能く千里なることを知って食うにあらず。」

【訳文】飼い主の方は、その大食らいめが千里の馬だとは知らない。この馬はよく食うやつだと思われるのが関の山、ほかのありふれた馬なみのかいはしくれない。

6B 清水茂『唐宋八家文(一)』朝日文庫「中国古典選」35

【二三三・二三五頁】一九七八年

「馬を食う者、その能く千里にして食らうを知らず。」

【訳文】ところが、飼い主の方は、千里も走る能力があるからこそ大食らいだとは知らない。この馬はよく食うやつだと思われるのが関の山、ほかのありふれた馬なみの飼いばしくれない。

6C 清水茂『韓愈』筑摩書房「世界古典文学全集」30A

【二八・三〇頁】一九八六年(書き下しは6Bと同文)

【訳文】馬を飼っている者は、千里を走る能力があるが故にこんなに食うということを知らない。

まとめ

我が国で韓愈の「雜説」は謝枋得『文章軌範』の注解によつて「馬を食（やしな）ふ者、其の能（のう）の千里なるを知りて食（やしな）はざるなり」と読まれてきた。ただし韓愈の別集までさかのぼる場合は文献学的に、前節で紹介した清水茂氏が発表しているような「その能く千里にして食らふを知らず」という読みが成り立つ根拠がある。『昌黎先生文集』もしくは『韓昌黎集』を出典とし、清水茂説を参照して「不知其能千里而食也」という返り点を付けた「雜説」を載せる高校教科書が、いつ出現してもおかしくないのである。むしろ参考書に、「其の能の千里にして食らふを知らざるなり」という読みは、朱子の解釈と同じとなるという、異説への言及がなかつたことを不備と感ずる。よつて問題は、解釈や訓読に重要な別説のある古典教材をどう扱うかに発展し、本稿の当初の目途を越えてしまふ。

最後に調査不十分のため言及できなかったことを挙げておく。第一に、中国ではこの「雜説」の「食」字をどんな発音で読んでいるのか、まとめきれなかつた。彼の地で盛行する清・呉楚材、吳調侯編『古文觀止』巻七の「雜説」の読み、特に「而食也」の「食」は、韓愈の本集への朱熹の考異どおりに、本音のシイ（ㄕㄞˊ 2声）とするものと、それに反対し直前の「食馬者」と同様に去声スウ（ㄕㄨˋ 4声）で読み、日本で通説と同様に解するもののがあい半ばすると予測するのだが。

また、明治期以降の漢文教科書で、どのように韓愈「雜説」が教材化されていったかを追いかけなかつたし、目前にせまつた新課程、「総合国語」だけが高等学校国語科の必修となる教科書で

の、この教材の出現頻度も、いくつかの教科書に載っていることを知つた以外は調査しなかつた。これら漢文教科書の「雜説」の解釈については、どちらも「食馬者、不知其能千里而食也」という訓点にもとづいたものであるに違いないとみなして、あえて調べる労を避けたと弁解しておく。教科書での異同は、右の箇所では「能」を副詞として「よく」と読むのか、馬の能力とみて名詞の「のう」と読むのが半々に別れていることと、末尾の文末の助字が出典によつて「耶」であつたり「邪、…也」であつたりという文字の違いがあることぐらいになる。近十年、目に触れた限り、「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」のどの高校教科書が「雜説」を載せているか、出典ごとに区分して付録とする（*は平成十四年発行、※は平成十五年の新課程『総合国語』）。

韓愈「雜説」掲載の高等学校「国語」教科書（出典別）

〔選択科目の教科書「古典Ⅰ」掲載分を除く〕

『韓昌黎集』（邪、…也。〔末尾の助字、以下同〕）

東京書籍（能ク「文中」「よく」と読ませる、以下同）

*『精選国語Ⅰ』漢文編二唐代の詩文〔二九三頁〕

*『国語Ⅰ古典編』漢文編二唐代の詩文〔一〇九頁〕

*『新編国語Ⅱ』漢文編一唐代の詩文〔二五九頁〕

『昌黎先生集』『昌黎先生文集』（邪、…也。）

第一学習社（能ノ「文中」「のう」と読ませる、以下同）

* [改訂版] 『国語Ⅱ』 漢文編 中国の文章【三〇六頁】

* [改訂版] 『新訂国語Ⅱ』 古典編 漢文編 文章【九六頁】

『文章軌範』（耶。：耶。〔一例を除く〕）

旺文社（能ノ）二件ともに同社刊の教科書セミナーから類推（）

『国語Ⅰ』 [改訂版] 漢文展開編 中国の詩文

『新国語Ⅱ』 漢文へ3Ⅰ（末尾は「邪。：也。」）

教育出版（能ク）

* 『新編国語Ⅱ』 漢文編 詩文【二六六頁】

* 『国語Ⅱ』 漢文編 1 詩文【二八一頁】

尚学図書（能ク）

* 『新選国語Ⅰ』 [改訂版] 漢文編 2 中国の詩文【二七七頁】

* 『新国語Ⅱ』 漢文編 詩文を味わう【二七四頁】

『古文真宝』（耶。：耶。）

三省堂 A（能ノ） * 『国語Ⅱ』 漢文編 1 詩と文【二七四頁】

『唐宋八家文読本』（邪。：也。）

学校図書（能ノ）

『国語Ⅱ』 [新版] 十六 漢文【三三】【二七二頁】

角川書店（「今」を「食馬者」の上に挿入・能ク）

『総合国語Ⅰ』 [四訂版] 中国の詩文【二四八頁】

桐原書店（能ク）

* 『探求国語Ⅱ』 (古典編) 漢文編 1 詩文【八三頁】

※ 『探求国語総合』 (古典編) 漢文編へ2 詩文【一一二頁】

三省堂 B（能ク）

* 『新編国語Ⅱ』 漢文編 名家の散文【二八八頁】

* 『明解国語Ⅱ』 [改訂版] 中国の詩文【二〇四頁】

大修館書店（能ノ）

* 『国語Ⅱ』 [改訂版] 漢文編 1 中国の文学【二九〇頁】

* 『現代の国語Ⅱ』 漢文編 1 中国の文学【二〇五頁】

※ 『国語総合』 漢文編 3 唐代の詩文【三〇六頁】

筑摩書房（能ク）

* 『新編国語Ⅱ』 [改訂版] 古典編 古典（一）【二四七頁】

明治書院（能ノ）

* 『高校生の国語Ⅱ』 漢文編 1 詩文【二五〇頁】

右文書院（能ノ）

* [改訂] 『新国語Ⅰ』 漢文編 1 詩と文【二八〇頁】

（早稲田大学非常勤講師）